



出汁巻き卵

高校一年生の時、学校に内緒で本屋でアルバイトをした。

高校は地元の進学校で学習に専念すべく校則でアルバイトは禁じられていた。

高校に進級した途端、勉強する気力も失せ、生活の中心が学業に対するより、洋楽や漫画などのサブカルチャなど遊びの方に費やす時間が増えていった。

一カ月の“こずかい”は二千円。LP一枚も買えない金額だった。

中学校から漫画に嵌っていたから、次々に発行される雑誌や単行本を手に入れたいたいという気持ちが強くなる。

実家は、母親が内職をするくらい経済的に厳しい。それじゃ仕方がないから自分で“こずかい”を稼ごうと、日常的に本を買い立ち読みする本屋の“おばちゃん”に声をかけてみた。

「アルバイトとか探してるって？」

バイト募集の張り紙は日常的に掲示されていたので大丈夫だろうと思った。

顔見知りで年齢も学校も知っている私の申し出に“おばちゃん”は快く私をアルバイト店員として雇い入れてくれた。

土・日曜日と学校が休みの日。テスト週間とかは、ナシ。学業に差し障るような無理なシフトも一切なかった。

本屋でのバイトは、本好きの私にとって天国のような仕事だった。新刊の情報の入手は勿論、“つかみ本”を貰ったり、返品のかかない雑誌の“ふろく”を貰ったり。チョッとだけ“本屋さん”の内情を知ったり。仕事が苦になる事は無かった。

夏休みは、平日も働いた。

朝一番は、店の掃除。

砂埃立つ床を箒ではき、塵取りでゴミを取り、水をまく。

その後、ハンディーモップを持って埃を払いながら、雑誌の位置を整え、背表紙を揃え商品を補充した。

在庫を出そうと引き出しを開けると、砂と塵が溜まっていた。無性に気になりだして掃除道具箱にしまった箒と塵取りを取り出し、砂と塵をかき集めたら、小銭が出てきた。

（あれ？他にもあるかも...）

と思って全ての引き出し奥の砂と埃をかきだし掃除してみると単行本が一冊買える程度の金額が出てきた。

「おばちゃん、こんなに、たくさんお金が落ちてたよ...」

とみせたら

「お客様の財布から落ちたんだわ。レジ回りじゃないから、あげるよ。

見えないところまで掃除してくれた“お礼”」

と言ってくれた。

嬉しかった。

あまり褒められた経験がなかったし、数年前の私にとっての一カ月分の“おこずかい”の金額を超え

ていたからだ。

（太っ腹な人なのか？）

不思議な気分だった。

そうかと思えば、商品を入れる袋に店のスタンプを押していると

「橘さん、そんなに何度も朱肉付けなくっても一度つければ数枚いけるから。インクが勿体ないでしょ...」

と言いながら、私の手からスタンプを取りあげて、手際よく朱肉一回に付き数枚の袋にインクが刷れる事なく伝票算をする如くスタンプを押していった。

「こんな風にやってみて...」

スタンプを手渡されて押してみたけれど、直ぐには綺麗に押せずに結局最初のうちは、一回付けて時間をかけて数枚ずつ住所が消えないように押していった。数日で力加減やタイミングを覚える事が出来たが

（簡単そうに見える作業でも直ぐには上手くはいかないモノなんだな）

と、しみじみ思った。

毎日午後3時ごろにトラックが、荷物を運んできた。

「荷物着きました」

パート一年以上の女性声が聞こえると、店員は、店奥から表に通じる通路に集まり、明るい光の中に止まるトラックの荷台から次々と投げ入れられる段ボールを男性定員が店の奥に運び入れた。箱を開け注文票と本をチェックする。トラックの荷台には、今度は返品本が詰まった段ボール箱が次々に積まれていく。十数分の慌ただしい作業。手順や動線が変わらないように気を使いつつもゲームのようで面白かった。

配達された雑誌に付録を挟み輪ゴムで止める。特集号とか特別な時期は、付録が多すぎて何本も輪ゴムが切れてしまい、うまくおさまらない。そんな時には、仕方なしにビニール紐で縛る。この縛る作業がめんどくさかった。購入する客が、雑誌を開ける時に“はさみ”を使う必要のないよう“ちょうちょ結び”にする必要があったからだ。加えて、積み上げやすく下の本を傷つけないように“ちょうちょ”の中心部分を小さく柔らかめにしないといけない。これが私には難しかった。

巧く“ちょうちょ”結びが出来ない私におばちゃんは

「橘さんは、挟むの専門で金子さんが紐でしばりゃあ〜」

と、笑って言った。

金子さんは、ベテランなので全ての作業に通じパワーを持っていた。

私が、雑誌に付録を挟むスピードと同じ速度で、紐を十文字に縛り小さく“ちょうちょ結び”をする。あっという間だった。

（なんで他の人は器用なんだ？）

己のふがいなさを思うと辛かった。

店の客足が増えて来ると、店員は店に出て、本の補充や化学ぞうきんで本の表面の掃除をしながら、客の動向を探ったりした。店員がいる事で万引きの抑制になったからだ。一時間に一本程度の電車の発着に合わせるように、通勤時間帯には激しく、日中は緩やかに客が店を満たした。

昼食は交代制で外に食べに出かけた。ちょっとした定食でも時給の倍、“贅沢は敵”とばかりに、一番安いラーメンでしのいだ。これだと時給の2/3程度で済んだからだ。成人して生活していくのに必要な食費を始めて意識したのも、バイトのお蔭だった。

冬休みは、“稼ぎ時”だと思って、元旦の休店日を除いて10時から5時まで毎日働いた。

一月二日のバイト初め、お昼になると

「橘さん、お昼奥に用意してあるから、食べに来て」

と、私を呼んだ。

当時は、コンビニもなく飲食店の殆どは、三が日は休店していた。

思春期で年の離れた大人との距離感が分からず、遠慮しようと思ったが

「正月だから」

という言葉と共に背中を押され座敷に上がらされた。

「昨日、店閉めてから御節作り始めたんだけど、ど～も出汁巻きが上手く出来なくて何度焼き直したか...」

と言いつつ、御節を小皿に取り分けてくれる。

うちの御節には、出汁巻き卵が入ってなかったし、一般家庭の出汁巻き卵を食べた事がなかったので、その苦労が分からず、ただただ恐縮して頬張った。

『美味しかった』

ただただ

『出汁巻き卵って、こんなに美味しいものだったんだ』

と、感じた。

そして正月に店に出る店員には、“お年玉”が配られた。

高校生になって“お年玉”枠から外された私に手渡された“お年玉”

なんだか、おかしかった。

(仕事なんだから別にいいのに)

と、思いつつ

(ま、でもコレで本買うんだからいいのか?)

よく分からなくて、大事にしまった。

この“お年玉”は、その後『お守り』として大切に保管した。その頃の私は、神社仏閣の成り立ちや日本人独特の宗教感やらに興味を持ち始めていた。県下でもトップクラスの売り上げだった店だったから金運上昇の『お守り』になりそうだと思った。

高校1年の三学期も終わり春休みになってからもバイトに出た。

学校に見つからないように注意していたのに、よりによって担任の先生に出くわした。

「あれ～橘さん、こんなところで何してるの？バイトしてるの？」

満面の笑顔で聞かれた。

「は...春休みですから...」

「そうかあ～、ま、頑張ってる！」

それで済むと思った。

(2年になれば担任じゃなくなるし)

翌日の夜に再び担任は現れた。満面の笑顔で

「じゃ、バイトの許可証出しといて。進路指導の先生には言っておいたから」

バイトは続けたかったけれど、進路指導の先生は苦手だった。

おばちゃんに先生に見つかった事を説明してバイトは止めた。

後日、おばちゃんが

「先生に聞いたら、バイトは許可したって言ってたけどねえ」

って、不思議がられた。

ごめん、おばちゃん。

事情説明してなかったけれど、うちの高校、誰も正式にバイトしてなかったんだ。

『文武両道』を掲げて、職員室の廊下に合格した大学の名前と氏名を公表する感じの校風のなかでは、バイトを続ける事による学校とのトラブルの方が怖かったんだ。だって、自宅が飲食店や自営業の家庭の子も表向きは、お店を手伝わないのがルールだったんだから。。。

あれから35年以上もたったんだね。

フェスの時に長男に体調を聞いた時には、元気だって言ってたのに。

あっという間に逝ってしまったんだ。

あっけないものだね。

地元みんなが、悲しんでるよ。

地元の大事な本屋さんの“おばちゃん”が逝ってしまったって……。

ほんとにありがとうございました。

そして、お疲れさまでした。

ゆっくりと休んでくださいね。

五目御飯

白壁の周りを取り囲む水路。石でできた家に通じる橋。門をくぐると日本庭園と畑。田舎にありがちな古い邸宅に二十人ほどの生徒が押し寄せるなんてことが日常茶判事のようにあった。

日焼けした浅黒い顔の先生が

「よう来たなあ、まあ上がれ」

と満面の笑顔で招き入れてくれた。

二階の書斎に通されて

「何かレコードをかけようか...」

と笑いながらキャビネットからLPを出すのが全てがクラシック。

「先生フォークソングとか、今時のレコード持ってないのお〜」

部屋を物色しながら騒ぐ生徒に

「ないなあ〜ラジオでしか聞かんからなあ流行りものは」

と、らしい答が返ってきた。

食事の支度が出来るまでの僅かな時間、生徒の気持ちを盛り上げようと気を使ってるようすが面白かった。

しばらくワイワイ雑談をしてると書斎の襖から白い手が出て先生を手招きした。

「おお、みんな大したものはないけど、あちらの部屋でめし食べよう」

座り込んで生徒を立ちあがらせ、別教室に誘導するように二階奥の和室に向かわせた。

そろばん塾にある様な木の座卓に座布団。奥から順につめて座る。何故か私の前には、先生が。目の前に先生が座っているという緊張感より、食い意地の張った私を緊張させたのが、座卓に並べられた“鶏のから揚げ”“茶碗蒸し”“味噌汁”“マカロニサラダ”に“五目御飯”。

（そうかあ〜それですか。これじゃあ、うちのお握りに手が出なかったわけだ）

“納得した”

今なら『おにぎらず』として通用するが、山口百恵がドラマ“赤いシリーズ”を熱演していた時代に生徒から差し出される数々の弁当の中から『おにぎらず』は選べない。

から揚げは、中学一年の時の遠足で、先生から新卒の副担任に手渡されたフードパックに入っていた。副担任と私は、漫画の貸し借りをしてプライベートでも交流があったから、その辺の事情は既に入手済み。

（これだ、これが、あの“から揚げ”だ）

平静を装いながら感動していた。

「味ご飯は、お代わりがあるそうだから遠慮する事はないぞ」

頂きますの挨拶もおざなりに、迷い箸になりながら食べ始めた。どれもこれもが美味しかった。人参・ごぼう・こんにゃく・油揚げ・鶏肉細かく切られて彩りよく炊かれた五目御飯は、休みなく働く先生への慈しみを感じるような気がして憧れた。

（こんな奥さんが欲しい。これだから男は得だ）

女子は家庭科、男子は技術、そんな時代だった。

食事も一段落し、会話が弾む。手際よく食べ終わった食器も片付けられた。

おしゃべりは尽きない。政治から、さまざまな噂話そしてオカルト談。

3時になるとケーキが用意された。コーヒーにするか紅茶にするか聞かれ各自答えた。

白いコーヒーカップと花柄の紅茶カップ、カップの横に乗せられた角砂糖。ケーキ皿にはイチゴショート。

(用意するの大変だったろうに)

買い出しに仕込みに、後片づけ。実家も人の出入りが多かったから、人をもてなす苦労は理解出来た。

家庭科の調理実習では、事前に行程表を作る。調理実習の当日は、登校時に米を洗い、休み時間に材料を配り、実習時間に調理する。一人前多く作って各クラス担任に食べて貰い感想を書いてもらう。給食を食べた後の試食は、きつかったろうけれど、そんな時は、職員で分けて食べたという。

最後の調理実習は、“お菓子”作りだった。

「子供が喜ぶ“パーティ”をイメージして」という課題だった。

私のグループは、クレープを作った。生クリームとバナナとチョコレート。生地は、さほど薄くも焼けずモッタリした出来で、余った生クリームを皿に盛り付けた。

家庭科の先生は

「クレープって、パーティに出すかなあ？ま、それ言うと、あちらの果物のフリッターも出さないか。」

大きな身体を揺すって笑った。

皿を下げに職員室に行くと、先生が感想を書いた紙をくれた。

そこには鷹揚な文字で

(西洋お好み焼きは、美味しかったです。職員で分けて食べました。

申し訳ない。クリームは、食べきれませんでした。)

と記されていた。

好き嫌いが多く、給食を率先して残すタイプの先生なのに、よく頑張った。

皿に残ったクリームから先生の苦戦を思ったら笑えた。

大きな身体を揺すって、真っ赤な口紅をして

「私は、家庭科を教えて“伝統食”の大切さや意義は分かるけれど、“御節”は、甘ったるくて嫌い」と言っていた先生も亡くなった。

そして、

「真夏の暑い時にな、部屋を閉め切って油絵を描くのが面白い」

と書齋で語った先生も亡くなった。

「おい、ここにきて、チョッと座ってみろ」

と、膝に女生徒を抱えるセクハラ紛いの冗談が好きな体育の先生も亡くなった。

なんだか随分遠くまで流されてるような気がする。川の流れが速く海まで流されたような気の遠くなる記憶。今年の辛い夏も直ぐに終わるような気がする。なんだか骨がきしむように寂しい。

チキンラーメン

小学校5年と6年生の担任は、油絵を趣味とする人で写実的な静物画を好んで描いていた。生徒の間では、鼻屑する先生で有名だったけれど、今思えば趣味の合う生徒の親と懇意にしていただけだったのかもしれない。

昔ながらの日本家屋に日本庭園。

ご多分に漏れず『和風』のしっとり豪華な住いだった。

5年生の春休み女子数名で、先生の家遊びに出かけた。

応接間に通されて、騒がしい女子の話の笑みを浮かべながら聞き、

時々更に話を具体的に聞き出そうとする姿勢が、

如何にも“教育者”的だったと大人になってから気が付いた。

女子の交友関係や家庭環境を日常的な“おしゃべり”からリサーチしていたんだろう。

6年生の家庭訪問では、母が赤面するほど我が家の内情を把握していた。

思春期を迎え始めている女子のたわいない話にも真面目に答える姿に

私は、『壁』を感じていた。

お昼になると、先生の娘が、ラーメンを運んできた。

人数分ラーメンは麺が伸びることなく丁度良い硬さだった。

「美味しいねえ～。暖かいねえ…」

口々に感想を言いながら食べた。

先生は、苦笑いしながら

「でも、インスタントだから。申し訳ないね」

と言った。

瀬戸物の丼にナルトとシナチク、刻みネギ、そして鶉の卵が落としてあった。

盛りつけのセンスが良くて、家で食べるそれとは、別物を食べてるような気がした。

六年生の夏休み先生は、虫垂炎で入院した。

女子数人で、お見舞いに行くと

普段見た事もないような笑顔で

「大人になってから盲腸の手術をするのは、

死んじゃうかもしれないくらい大変なことなんだよ」

と言った。

他の見舞客が持参したであろう種無し葡萄を食べながら

「手術って痛かったんですか？」

と聞いたら

「麻酔が切れてから涙が出るほど痛かった」

と大人なのに子供の表情で語っていた。

南向きの病院の個室の風景を今でもはっきりと覚えている。

大人になって都会で一人暮らしをし帰省した夏、
誰からか先生が癌で亡くなったことを聞かされた。
実感を伴うことなく、ただぽっかりと小さな穴が開いた気分だった。

“料理する母”の姿を版画で描いた時、鍋の立て横の長さの比率を
指で測りながら首をかしげ、納得いかない表情をしながらも
『高得点』を付けてくれた先生だった。
三日月のような顔をした、
ちょっと保守的で、それでいて今思えば、
偏見のない聖職者だったと感じている。

から揚げ

近所では“佃煮ばばあ”と呼ばれるほど、シジミのつくだ煮を買いこむ祖母だった。料理が苦手なせいもあるが、ひとり子供を産むたびに一年寝こむほど、身体自体も弱かったと聞いている。大工だった祖父は、そんな祖母に対して文句を言うこともなく、味噌汁を作り、ご飯を炊き家事の殆どを、こなす人だった。

『産めよ増やせよ』の時代。

“産む前に産着を縫うな”“産後針仕事をすると目が潰れる”などといった言い伝えのあった時代。祖父は、祖母を気遣い、家族の服のボタン全てを釣り糸に付け替えたという。

「子供は、学校に行くことが仕事」と言ながら、五人の朝食作りも弁当作りも祖父が、こなした。

先祖代々家柄を誇る家であったが、古いしきたりを嫌う祖母は、本家に入ることなく生活していた。

本家に伝わる“しきたり”を守るのは、長男の嫁だった。

昭和一桁の時代、それは一般的には許されない事柄だった。

その為に嫁との確執も多かったし、近所の評判も悪かった。

中学生の頃だったろうか。

祖父の家で二つ年上の従姉と思春期特有の話題で盛り上がる昼時、台所から甘い香りが漂ってきた。

「あれ、お婆ちゃんお菓子でも作ってるのかしらね？」

従姉が言った。

「なんか揚げてるみたいだね」

珍しい事もあるもんだと思っていたら、台所からお婆ちゃんが

「昼ご飯出来たから、食べに降りといで」

と、応接間に顔を出した。

応接間に隣接した一段下がった板張りの台所のちゃぶ台の上には、大皿に乗った鶏のから揚げ、ご飯に味噌汁の湯気が立ち上っていた。

従姉と二人で床に座り、小皿に鶏のから揚げというよりは天麩羅風の主菜を口にした。

甘かった。砂糖と塩を入れ間違えたのか、とも思ったが、これがオリジナルな味のようなかった。

「甘い鶏のから揚げって初めて食べた」

従姉は笑った。私も初体験だった。

「どうや、食べれるか？不味くないか？」

細面の皺だらけの顔に照れ臭そうな笑みを浮かべて祖母が聞いてきた。

「不味くはないけれど、甘いよ。でも美味しいよ」

醤油の下味のきいた鶏肉に、ドーナツのように甘い衣。ミスマッチで美味しかった。

「好きなだけ食べりゃあ」

初めて食べた、ちょっとだけ手の込んだ祖母の手料理。

なかなか独創的だったけれど、どれも美味しかった。

家に帰って、この事を母に告げると

「あの人は、揚げものが好きだから。作る料理は自分が好きなものだけなんだよ」と言った。

数十年後の祖母の葬式の時、祖父は

「あんなに“ええ女”は、おらんかった。茶揉みの巧い別嬪だった」と、何度も参列者に語っていた。

明治の恋愛事情は想像もつかないけれど、祖父の祖母に対する愛情表現は

「聞いているこちらが恥ずかしくなってくる」

ほど、ストレートで豊かだったようだ。

痴呆が入っても祖父を気遣った祖母。

嫁からみるととんでもない舅と姑だったようだが、

孫からみると、なんとも微笑ましい翁（おきな）と嫗（おうな）であった。

空き地になった祖父の家の跡地を見るたびに時の移ろいを感じる。

今、当時の面影を残すのは、倒れそうな木造の二畳ほどの物置だけである。

日本酒

晩秋にもかかわらず、その夜の風は、ぬるかった。
身体にまとわりつくような風を浴びた散歩の後の風呂上がり、
麦酒を呑もうと冷蔵庫を開けると、そこにあるのは、500ml一缶。
それを著名タレントの描く青い朝顔がプリントされた透明なグラスに注いで呑み、
ひと心地ついても、まだ呑み足りない。

(外に買いに出かけるのも面倒だし...)

そう思ってから、ふと

(日本酒を『冷や』で呑んでみようかしら...)

と思ったのが、その夜の不思議。

“うわばみ家系”ではありますが、私は日本酒だけは一滴も呑むことが出来ない。

酒饅頭も酒漬けも駄目。

なのに。

赤い紙パックに入った普段は料理用に使っている日本酒を我が家では高価な部類のグラスに入れ、
呑んでみた。発酵した液体がとろりと喉を通り、胃に沁みとおるのを感じる。

(あれ?これは、呑める)

いろいろなことが、あり過ぎて精神的に疲れていたからありがたかった。

冷蔵庫から、キャベツを取り出し、クレージーソルトを振ってツナ缶を入れ、

市販のドレッシングをかけてコールスローを作ってみたら、とても相性が良く、

どんどん酒が進んでいった。

呑むうちに、何故だか、酒が水のように感じられてきた。

(最近の酒屋の商品開発力って凄いなあ...)

よく分からないんで、そういう事にしておいた。

産まれて初めて500mlの日本酒を呑み干し、

ほろ酔い気分で気持ち良く寝室に向かい布団にもぐり、

その夜は、夢を見る事もなく、ぐっすりと眠った。

翌日、朝家事をしていると電話が鳴った。実母からだった。

「本家の伯父さんが亡くなってね、昨日告別式が終わったところ...」

数日前に従兄弟と話をしたときには、

「耳が遠くって電話のベルも聞こえないけど、元気だよ」

と、近況を聞いていた。

その後も寝込んだという話は、聞かなかった。

「心筋梗塞か、心臓発作だったらしい...」

実感が湧かないまま、夜を迎え風呂上がり覚えたての『酒』を呑もうとしたら、

あんなに美味しく感じた『日本酒』は、以前と同様、舐める事すら出来なかった。

「山を守らないと墓も守れん」

と言いながら、資産価値の低い山を買い、日の出から日没まで、休まず働き続けた伯父。

大工仕事が丁寧で腕も確かで、自宅も全て自分で建てた“建築”畑だった伯父。

一升瓶抱えて、遅くまで私に向かって、あれこれ語り、翌朝

「悪かったなあ、くどくどと喋り過ぎたわ」と、頭を搔きながら詫びてくれた優しい伯父が逝った。

猫屋敷と言われるほど猫好きだったから、

虹の橋で待つ猫たちと共に旅だったのだろう。

さまざまな貴重な体験を私にくれた伯父。

今はただ感謝の気持ちと寂しさしか感じない。

『クニシス』

僅か四文字の電報が、正月三日夜に奥三河に届いた。

翌日に予定していた母の実家への帰省を諦め
母と兄と私は、家に向かった。

家に着くと母は、和筆筒から喪服を取り出し風呂敷に包み
列車の時刻を確認して

「1時の電車に乗るから着替え準備して。」
と、言った。

兄と私は、忙しそうに仕度する母を見ながらも
何の実感もなく自分たち用の着替えを鞆に詰め込んだ。

祖父の家に行くと正月から泊まり込んでいる親戚一同が
香典やお供えの手配やら、移動のためのタクシーの手配やら
座ることもせず、動き回っていた。

「あ、〇〇子さん来てくれたの、じゃ申し訳ないけれど
順番に着付けの方お願い出来る？」

母は、着付けを得意としていたので冠婚葬祭のときは重宝されていた。

祖母から歳の順に喪服を着つけていく母の手際を、当たり前のように見ながらも
叔父の死の実感は、沸いてこない。

大人の会話から叔父の死の原因が交通事故によるものだという事は理解できた。

多忙な大人たちの横で炬燵に入って9人の子供は、時間を持て余し気味にTVを見ていた。

仕度がそろそろ整うころ、鬼瓦の顔をした叔父が

「ええか、君たち、今晚一晩留守番を頼むぞ。火の始末と戸締りに気を付けて。
年上の4人は、ちびたちの面倒しっかり見とくれよ」

と言ひ残し、手配したタクシーに乗り込んで出て行った。

小学6年を筆頭に下は3歳の幼児が通夜の席に同席させるのは邪魔になるだけだという判断だった。

大人たちが出かけてしまった後
残された子供たちが一番に考えたことと言ったら

(うちの晩御飯はどうなるんだ?)

という程度のものであった。

コンビニもなく、ましてや正月三日は店の開いてない時代
夕食の準備もされておらず、御節も底をつき始めていた。

辛うじて炊事ができるのは、兄と一つ年下の本家の長男
そして兄と同じ年の本家の長女と私の四人だった。

「じゃ、男組と女組に分かれて晩飯を作る」
そう提案したのは本家の長男だった。

二手に分かれて作戦会議を開き
冷蔵庫から適当に材料を選ぶ。

男子は白菜に大根に蒲鉾
女子はキュウりにちくわ

競争するように準備した。

使い慣れない包丁で普段したこともない調理

ちくわは半分に切り
キュウリを縦方向に八等分にして
穴に詰め込んだ。

シンプルな白い皿に盛りマヨネーズとオーロラソースで飾った。

男子はというと、大きなアルミ鍋に材料を切って入れ様々な調味料を入れて煮込んでいる。

人数分の茶碗と箸を用意して横長のテーブルの真ん中にアルミ鍋そしてその横にきゅうりちくわを置いた。

小さな従妹たちは、暖かな鍋ばかりを食べ
私たちの作った“きゅうりちくわ”には、目もくれない。

(ちえ、せっかく作ったのに...)

いらっ...とした気分で
私たちは顔を見合わせた。

勝利宣言をするように兄は、

「残すと勿体無いから、ちくわも鍋に入れよう」
と言いながら

手際よく、“ちくわ”から“きゅうり”を離し
ちくわを鍋に入れ火にかけ
きゅうりは、スライスしてソースと合えた。

悔しかったけれど、やはり鍋に入れた“ちくわ”の方が
断然美味しかった。

食器を洗い、台所を片付けて居間に戻り、みんなで一緒に
正月の続きのようにテレビを、炬燵に入って見ていた。

9時前の5分程度のニュースは
正月三が日に起こった東海3県の交通事故の件数を告げていた。

「くにちゃんも、この中に入ってるんだよね」
従弟の一人が言った。

子供らにとって【死】は遠くにありすぎた。

布団も敷かれては、いなかったの
その夜は、炬燵に入り毛布を被ってごろ寝した。

炬燵は、入ると暑過ぎるし、出ると寒すぎる。

他の子供たちの寝息を聞きながら
私は、起きたり寝たりを繰り返して、一晩過ごした。

朝食は、男女4人手分けして作った。
無駄なゲームをする余裕はなかった。

鍋に味噌を溶いて汁を作り
スクランブルエッグをフライパンで作
赤いウインナーを焼いた。

みんなで揃っての食事は楽しく美味しかった。

冷蔵庫の食材が、僅かになっていく。

(あと昼食と夕食を作らないと...)

朝食後、4人集まって
冷蔵庫・倉庫・にある食材をさがした。

「おお、ラーメンと缶詰がっ、玉葱とジャガイモもある」
倉庫で従姉が声を上げた。

「カレー粉があれば、夜はカレーが出来る」

「カレー粉も何所かにあるはずだ」

家探しを始めた。

倉庫の中、食器棚、冷蔵庫...

「卵丼にしとこうよお～」

従姉が弱音を吐くと

本家の長男が、

「昼のチャーハンで卵は尽きる」
と真顔で答えた。

(なんでこんなに分散してしまっているんだろう)

と思いつつ、レンジ横の茶筆筒の奥の引き戸を開けると
粉末タイプのカレー粉が立てて収納してあった。

「あった、あった、カレー粉、ちゃんとあった」

宝を見つけたように声を出して報告した。

「やったぜっ、じゃ、とりあえず、昼めし作るぞ」
従兄が言った。

「いや、チャーハン班とカレー班に分かれないと
カレー下準備が大変だから」
兄が提案した。

(こんな状態でも煮込みたいんだ)

母のカレーは、長時間煮込んでからの“とろみ”が売りだった。

子供会のデイキャンプでのカレーの持ち込みの時
「あれま、うちのカレーは人気ないねえ」
という、ご近所主婦の皮肉にも取れる会話を思い出した。

デイ・キャンプに持ち込まれた三軒の鍋で
一番行列ができ、完食されたのが母のカレーだった。

蒲鉾と卵の醤油味のカレーの評判はよく
日頃食の細かい従兄妹たちも“おかわり”するほど食べていた。

食べ終わったら、すぐ食器を洗い、テーブルに置かれた調味料をを片付け
兄たちが洗い皮をむいた材料を切っていった。

玉葱は薄切り、人参とじゃが芋はイチョウ切りにして
切ったはしから鍋に入れていった。

兄と従兄は油が跳ねるたび大騒ぎした。

鍋に水を入れ全体の分量を見ると、具が足りない。

「御節の煮物も入れるか？」

従兄が提案した。

「そりゃ、いい！下味ついてるしな」

(何でもかんでも入れて大丈夫なのかなあ)

と、思いつつ昨夜の負けが堪えていた私は何も言えなかった。

野菜が煮え適度にスープにとろみが出たところへ
缶詰を投入し、最後にカレー粉を入れた。

「よ～し、これで出来上がり。あとは、飯を炊いて温めるだけ」

いつの間にか本家の長男が料理長になっていた。

夕飯の時間までは、居間で正月の延長のように遊んだ。

大人が居ないから、ソファでジャンプしてもマットレスに突っ込んでも怒られない。

小さな子供たちは、はしゃぎ回っていないと泣き出しそうな雰囲気だった。

「飯炊き上がったぞ、晩飯にしよう」

外も真っ暗になった5時過ぎ、従兄が台所から上がってきて言った。

従兄は、私たちの知らない間に米をとぎ、炊飯器にかけていた。

食器棚から不揃いの皿を取り出し、炊きあがったご飯を盛りカレーをかけた。

「花形の人参があるっ！」

小さな従弟が、げらげらと笑った。

「美味しいねえ、すご〜く美味しいねえ」

食の細い従妹が、お代わりをした。

夕食の片づけを小さな子供たちも手伝うようになった。

洗いあがった食器を小さな手で拭いて、収納前にいる私に渡してくれた。

綺麗に片付いた食卓を見ながら、何とも言えない思いをしていると
台所の引き戸を叩く音がする。

従兄達が、興味を持って引き戸を開けようとする。

小さな子供たちは、怖がって居間の奥に逃げようとする。

引き戸を叩く音が大きくなった。

と、思ったとき一つ下の従弟が叫んだ

「鳥だっ」

その声が響いたと同時に、好奇心に取りつかれた本家の長男が
引き戸を開けた。

パタパタッ...と小さな羽を持つ鳥が、
捕まえようとする子供たちの手から手へと逃げるように飛び回る。

ソファーに飛び移り壁に追い詰められた小鳥を捉えようとした時
大人たちが、どやどやと帰ってきた。

「子供んたらは何しとる」

爺さまが怒鳴り声をあげた。

「爺ちゃん、とりっ！鳥が入ってきてる」

「そりゃ“くに”じゃ、一緒に帰ってきたんじゃ、逃がしてやれっ」
そう言って引き戸を全開にし鳥を外に逃がした。

「塩を撒いてくれ。葬式の帰りだから」
黒い塊のような大人達が、家に上がる前に服に塩をかけた。

泣きながら婆ちゃんが叔母に支えられて入ってきた。

「お前ら、よう留守番出来たな。ありがとうな」
と、鬼瓦の顔をした叔父が言った。

がやがやと大人たち通夜と告別式の話をする。

凍えた夜の空に、星がたくさん見えた。

「ほんとやねえ...“くに”ちゃん、みんなと一緒に家に帰りたかったんやね」

叔母がぼつりと言うのを聞いたとき、私の心に穴が空いた。

新春の朝

日本庭園は白い雪の覆われていた。

親族が楽しく宴を囲む僅か数分の出来事だった。

初めての男の子だった。家主からみると大切な内孫。

記念撮影をするのが恒例だったから、服は全て新品のブランド品

髪も年末に母のお気に入りのヘアサロンで切りそろえた。

暖かな部屋、大人がお膳の用意をしてるときを境に幼子は消えた。

降り積もった雪が庭の池を蔽う白銀の世界。

白鷺が舞うように彼も空に舞って逝った。

翌年から新年の“宴”は開かれることはなかった。